

ミニ講演 廣戸 勇(練馬区・児童通学案内員)

～ 児童通学案内員の取組～

私が6月28日、練馬区立大泉第一小学校前の信号で事件に立ち会った廣戸と申します。事件の概要をこれからお話しします。当日は皆様に大変なショックと不安を与えましたことを、壇上からお詫びを申し上げたいと思います。

さて、事件の当日は週末でしたので、1年生はちょうど1時40分頃に下校ということで、私は正門の外側にいて子供たちが下校してくるのを待つような態勢で準備をしていました。登校口の方向を見ていると、校長先生に挨拶をしている小学1年生の子供たちが10名ほどいましたので、私も扉の前に行き子供たちが下校するのを待ちました。すると、子供たちが楽しそうな話声をさせながら正門の小さい扉の方に向かってきました。

私は大きな声で「お帰りなさい。」と挨拶をしました。その日はちょうど午前中に1年生のプールがあったので、子供たちに「プールはどんな感じだった。」と尋ねたところ、「上手く泳げたよ。」というので、信号のあるところまで約15mくらいなのですが、そうした話をしながら子供たちを連れていきました。

信号前で10名ほどの子供たちを止め「おじさんは今から皆さんが渡る横断歩道の信号の押しボタンを押しますから待っていてください。」と告げて、約2.5mくらい先まで進み、信号の押しボタンを押してから子供たちのいる方へ1メートルくらい近づきました。

信号は赤なので、学校から預かっている「学校」という旗を右手で持ち、子供たちに制止するよう話をしながら前を見ますと、車道の方から一人の男性が我々のいる横断歩道の方に向かって来るではありませんか。歩道へはそのまま後ろの方から回る方が近いのに、なぜ、この人は6mくらいの距離があるにもかかわらず、わざわざ我々のいる横断歩道の方へ向かって来るのだろうと少し半信半疑でしたが、子供たちと同じように横断歩道を渡るのだろうと考え、相手の動きや、手に何か持っていないかを注視しました。すると、刃物らしきものは持たず、手をフラフラさせながら子供たちに近づいてきました。しかし、刃物は持っていなかったため、私もホッとしたような気持ちで、左横の方を見ながら車が停止線で止まってくれるのを確認しました。

(横断用の)信号が赤から青に変わったので、右手に持っていた「学校」の旗を左手に持ち直して、子供たちに横断歩道を渡らせるため一步前を出て、「渡っていいよ。」と声をかけようとした瞬間です。子供たちのいた所から「ぎゃあ、痛いよ。」という大きな叫び声がしました。慌てて振り返ってみますと、一人の子供があごの下を切られて座り込んでいました。そのとき私は咄嗟に「どうしてこんなことが起きたのだろう。」と頭の中が真っ白になりました。先ほど見たときは何も持っていないように見えた男が右手にナイフを持ち左右に振り回しながら子供たちを追い回している姿があり、ゾッとしました。

私もそのまま見逃すわけにはいきません。可愛い子供たちが追い回されているのを見て、学校から預かっている長さ1m、太さ12ミリの旗を持ち、犯人を子供たちから離すため「この野郎、何をやっているんだ。」と大きな声を出しながら、5、6mくらい先にいる犯人の方に詰め寄り、1.5mくらいの間隔を保ちながら、犯人と対峙しました。相手はナイフを振り回しながら、私に向かって突進してきました。私も怯む訳にはいきませんので、下がらずに持っている旗で男の顔をめがけて上下に振り回しながら、もし相手が飛び込んでくるのであれば、自分も相手の顔を叩いてもいいんだという気持ちで、子供を守るという気持ちで戦いました。

本当は、(派遣元の)シルバー人材センターでは犯人に向かっていくことは禁じられていますが、私が犯人を見つけた時点で危険人物と見極めることができなかった(刃物は持っていなかった)ので、被害を与えないだろうという安心感を持ったため、今回のような大きな事件を起こしてしまいました。ただ、そのときは子供たちを救わなければいけないという気持ちで一生懸命、かれこれ3、4分くらい旗を振り回していたと思います。時計を見て戦っている訳ではありませんので、時間はハッキリとは覚えていません。そうこうしているうちに、真正面に対峙していたはずの犯人が徐々に左側の方角に向きを変えながらナイフを振り回し始めました。私は、それに対しても動くことはせず、身体の向きを犯人に向けたまま旗を振り回しました。

ところが、どういう訳か、長く居たのでまずいという気持ちが生じたのか分かりませんが、犯人が車道の方にナイフを持って駆けるようにして逃げました。それを見て私も追いかけて振り向いたところ、学校の方からから応援の女の人に来てくれました。そこでまず「学校に事件が起きたことを知らせてください。子供が怪我をして

いるので救急車の手配をお願いします。」と伝えました。

そのため犯人を追いかけることはできず、しゃがんでいる子供を学校の石垣の方まで移動させ、手当てをする準備をしようとした矢先、犯人が自分で乗ってきた車に乗り一目散に逃走する姿が見えました。私からは車がよく見える位置にいませんでしたので、車の色は分かってナンバーや犯人の顔立ちはハッキリと見ることはできませんでした。また夢中になって戦っていたために、犯人がどんな人相、服装をしていたかも覚える余裕はありませんでした。ひたすら相手の手元を見ながら、どういう攻撃をしてくるのだろうと思い戦っていたので、子供を助けるために無我夢中でしたので、犯人の姿勢や、メガネや髭の有無など一番覚えていなければいけないことは一切覚えていませんでした。

そのうち学校から校長先生や副校長、保健婦、諸々の先生方が一斉に来てくれて、子供の手当と校内への避難が進みました。私が倒れている子供の血止めの手当をしながら待っているとき、すぐに警察官や地域の皆さんが駆け寄って来てくれました。そのまま警察の事情聴取を受けることとなりましたので、先生方に説明をする暇もなく、現場検証をしました。

私の目には、子供に横断歩道を渡らせるため取った行動以外のことは、ほとんど入っていません。だからいろいろなことを聞かれましても、自分がどうして犯人に向かっていったのかと聞かれましても、大人は私しかおりませんでしたから子供を助けた。「これ以上怪我をさせてはいけない。」という気持ちだけで旗を持って戦いました。

ご来場の皆様の中にはシルバー（関係）の方もいらっしゃると思いますが、私どもの決まりの中で、刃物を持っている人に対して向かっていってはいけないということは私も知っています。ところが、子供がやられているというそのことを見たとき、そういう話は完全に頭の中から消えて、一人の子供を助けなければいけない、また大勢の子供を助けなければいけないという気構えだけで向かっていきました。

私にも怪我がなく、犯人も地域の皆様の応援のおかげで車のナンバーや逃走方向が警察へ伝えられ、約50分以内に捕まえることができたという連絡を聞きました。そのとき私は現場にいて、犯人と対峙した位置やどういうやりとりがあったのかを警察の人へ話していましたが、「犯人が捕まった。そして犯人を見たのは私しかいない。」

ということで、覆面パトカーに乗り（埼玉県）三芳町まで一緒に行きました。

でも、犯人と戦ったときは、恐怖が先に立ったため犯人の顔はハッキリとは覚えていません。だから警察の方にも「私はこの人が絶対に犯人だという確証は 60%くらいしか持ってません」と伝えました。犯人の顔はよく見ているはずなのですが、そういう目では見ていないということです。子供を守るため犯人と戦う時間は数分間がありましたが、そのときは犯人の手元を注視していましたので、顔はよく覚えていません。

私は、子供が横断歩道を渡るとき、車にはねられないよう、車が完全に停止したことを確認しながら子供よりも一歩先に前に出て、横断旗を渡っても良いという方向に示します。また点滅信号の時に子供が渡らないような注意をしながら、毎日の務めをしています。

だから、もし不審な人が前の方向に見えたとしても、それを見抜くだけの眼力は我々にはありません。また今回は子供に逃げなさいというまでの時間と距離がありませんでした。これが一つの大きな事故につながったと思っています。「子供を助ける」というその場の判断が、被害を大きくさせなかったということで、自分なりに役目を果たせたのではないかと思います。

最後になりますが、地域の皆様、これから学校が始まります。いかにして、登下校時の子供を守ることができるか、これからのシンポジウムの中で話があると思いますが、一般的にできる子供の見守りという形で、親だけでなく、地域の皆様が一体となって子供たちの登下校を見守り、子供が安全に学校に行けるようにしていただきたいと思っています。今日はどうもありがとうございました。

（以 上）